

# BOOKS

久原正治

立命館アジア太平洋大学 経営管理研究科 教授

## グローバル人材の誕生

一月から三ヶ月月間シンガポールマネジメント大学(SMU)に教育研究のため滞在した。シンガポールは二〇数年振り、まず目に付いたのは日本の金融機関の退潮ぶり。数が大幅に減っただけでなく、昔のようなアジア地域の中で大きな存在感がなくなった。私の授業「Management in Japan」受講生に聞くと、誰も日本の銀行に就

生はマラでIT企業従業員に日本語を教える学校を設立した。日本の大手IT企業との打ち合わせの合間に訪ねて来た。インドネシアの卒業生はブルムバーク東京支社からシドニー支社に転勤するので途中に立ち寄った。タイ人卒業生は欧州でMBAを取り地場の商業銀行に勤めたが、多国籍エネルギー企業に転職することになり休暇を兼ね訪ねて来た。マレーシア人卒業生はシンガポールで海外投資アド

部長と話していたら、彼が編集した本を紹介してくれた。シンガポールは国家戦略として、アジア諸国の優秀な人材の採用、訓練の拠点になろうとしている。そのような人材は希少価値で、グローバルな規模での多国籍企業、国家間による人材獲得競争が起きているという。この本は、世界各地での頭脳獲得競争の現状をそれぞれの地域の専門家が調べた論文集であり、国家間競争の現状と日本の後れがよく分かる。

若者は国籍を問わず貴重な人材として多国籍企業で高い所得を得ることがができる。PANG教授の話を聞くと、アジアでは単に欧米流の教育や英語を喋れることだけでなく、アジア諸国の価値や歴史の理解が重要であるという。それは、家族や地域社会をベースとした多様な異なる情緒や人の感情の理解力のようなものだ。帰国して本屋をのぞいたら、昔読



① **Competing for Global Talent**  
Christiane KUPTSCH  
and PANG Eng Fong  
International Labor  
Office, Geneva  
2006/08



② **春宵十話**  
岡 潔  
光文社文庫  
2006年10月

職しようという人はいない。銀行支店長やメーカー現法社長に話を聞くと、日本企業は欧米多国籍企業にかなり後れて、優秀な人材の獲得こそが競争優位の源泉だということに気が付き、人材の集まるシンガポールを人事本部として、アジア各地の幹部候補人材の採用、訓練を集中しようとしている。

バイザーの仕事の始めた。現地で私の日常を世話してくれたシンガポール人卒業生は、大手不動産会社で日系企業事業用不動産仲介を担当している。在学時銀座のベンチャー協議会で半年預かっもらった学生で、今も起業機会を探っている。これら卒業生の話を聞き他の学生をの消息を聞くと、彼らが国境を越えて転職・移動しながら活躍していることが分かる。

そこで、我々はこのような人材を『グローバル・ヒューマン・タレント』と名付けて、その定義を検討してみた。そこでの基本要件は、英語を使用言語とした各専門分野の教育、グローバルな視野と経験、歴史的視野とアジアという地域特有の文化や伝統に対する理解、多様な人々の間でのコミュニケーション能力、どこの国に移動しても働けること、である。

これらの要件が整えば、アジアのんだ数学者岡潔の『春宵十話』が文庫本で再版されていた。岡は次のように語り始める。「人の中心は情緒である。情緒には民族の違いによって色々な色調のものがある。例えば春の野に様々な色どりの草花があるようなものである。数学はそのような情緒を外に表現することによって作り出す学問芸術の一つである」。分かりやすい日本語なので、ゼミの留学生に読ませようと思っている。